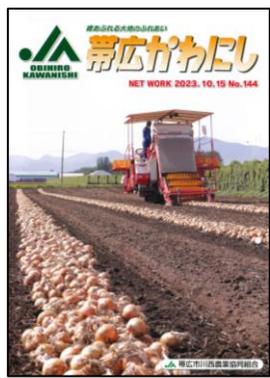




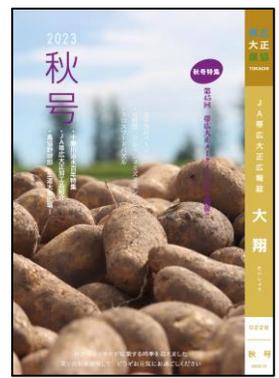
治水と地域の係わりに関する機関誌の発行

内容：治水と農業の係わりについて地域に周知するため、
農業協同組合（JA）広報誌に「十勝川治水百年特集」を掲載
掲載媒体：十勝管内23農業協同組合が発行する広報誌

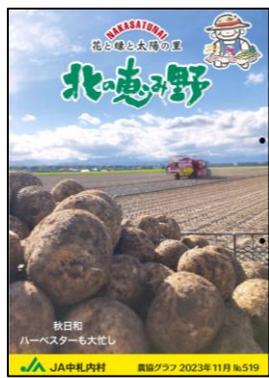
川西・大正・中札内・更別・札内編



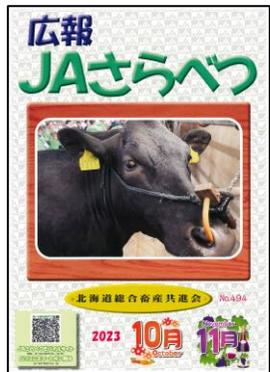
帯広市川西農業協同組合
帯広かわにし (10月15日号)



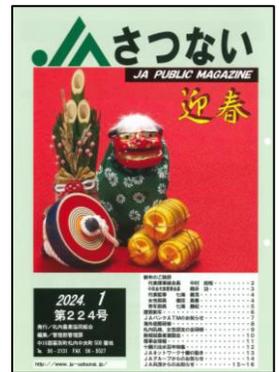
帯広大正農業協同組合
大翔 (秋号 10月号)



中札内村農業協同組合
北の恵み野 (11月号)



更別村農業協同組合
広報JAさらべつ (10・11月号)



札内農業協同組合
JAさつない (1月号)

JA INFORMATION

十勝川治水百年 特集 (川西・大正・中札内・更別・札内編)

十勝川の治水事業が百年を迎えました

十勝川流域では明治時代から入植者による開拓が始まりました。洪水被害を軽減する治水事業が、開拓の足音と共に進んでいきました。

札内川流域は明治時代から入植者による開拓が始まりました。洪水被害を軽減する治水事業が、開拓の足音と共に進んでいきました。

原野を拓き進む開拓

札内川流域は明治時代から入植者による開拓が始まりました。洪水被害を軽減する治水事業が、開拓の足音と共に進んでいきました。

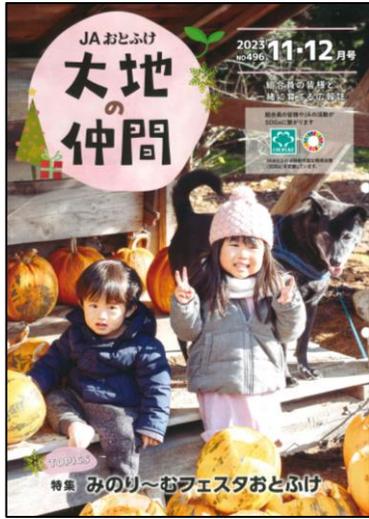
あつたおむいで 札内川と戸島別川
～学校帰りの憩い出と平成28年台風～

帯広市戸島別川は開拓当初は稲作が中心でした。ここには札内川と戸島別川の合流点で、川ではきまぐれな水害が頻りに発生する。平成28年台風での被害面積は約30ha。ひといしは2mくらいえぐられたり、まったくなくなった。決して土地改良を否定するわけではないけれど、暗渠や明渠の整備で水がスムーズに流れるようになって、水害は減りました。そうすると被害を受けやすいのは、中札内川。札内川は札内川ダムがあるだけだから、家に降るのはア方です。

JA 帯広大正 遠見賢夫さん (65)

※1 北海道建設局 国土計画課 国土計画課長 明 31-34 国土建設部 国土建設部 国土建設部
※2 北海道庁 国土建設部 国土建設部 国土建設部 国土建設部 国土建設部 国土建設部

音更・木野・士幌・上士幌編



音更町農業協同組合
大地の仲間（11・12月号）



木野農業協同組合
きの（1月号）



士幌町農業協同組合
ユートピアしほろ（11月号）



上士幌町農業協同組合
かがみしほろ（第438号）

令和6年1月

木野農協広報

第404号



十勝川治水百年 特集（音更・木野・士幌・上士幌編）

十勝川の治水事業が百年を迎えました

十勝川流域では明治時代から入植者による開拓が始まりましたが、当時の十勝川は曲がりくねっていて洪水被害を受けやすい地形でした。そして、開拓の中心地域である茂岩から西帯広までの延長500kmにも及ぶ区間に堤防、新水路掘削、護岸工事を実施するための計画が立てられました。大正12年、十勝川治水事務所が開設。現在の帯広市大通南1丁目）され、本格的な治水事業が開始されました。



十勝川治水事務所（昭和2年頃）

地域の礎を築いた開拓者 農業と川のかかわり



十勝頭首工

十勝北部から十勝川に合流する河川には音更川、士幌川、然別川等があり、明治期の沿川に多くの入植者が集まり、現在の音更町、士幌町、上士幌町の礎が築かれました。入植した当初はイネ、大豆、ソバ、茶類を播いて自給自足の食糧とし、余剰を出てくる大豆を売って販売しました。農業の労働力として重要な馬を飼養するため、各原野では牧場経営が進み、然別太では明治22年晩成社の渡辺勝が牛馬を飼いはじめました。一方で、明治35年冷害暴風による凶作で、明治40年豪雨冠水といった災害が続く。治水事業と並行して農業基盤整備が必要になってきました。大正期に音更川、士幌川でかんがい溝工事、昭和38年に士幌新橋下流に十勝頭首工が完成しました。こうして河川の安定化と土地改良の成果は、十勝有数の酪農富風、畑作地帯を形作り、現在に至ります。

あのときのおぼいで 然別川 地域総出で堤防守った「木流し」

（中谷）一番最初に思い出すのは、小学生の頃かな、然別川の国見橋下流の堤防が破れて、家の前や畑に広く水が流れたことがあった。
 （畔木）今ほど堤防高くないからね。その水はずっと抜けずに冬には一面が凍ってスケートで遊んでいた。
 （中谷）住宅の裏に流れていた昔の古川があって、雨が降ったときは低みに水が溜まって沼のようなところがあった。
 （畔木）釣りだとウグイやアブラコがいた。
 （中谷）昭和56年洪水の時は「木流し」が地域で行った。堤防近くの木を伐り、紐でしばって川に落とし、堤防を守った。
 （畔木）テトラポットでもあればいいけど土のうはあつという間に流れてしまうから。



JA 木野（左から）畔木幸一さん（69） 中谷清さん（73）

（中谷）子どもの頃も記憶があるけど、みんな総出で大変な作業だった。それでも決壊したら大変と小さい頃から経験しているから「何とかな」と作業した。
 （畔木）今は国や道が堤防の上を舗装してくれたり色々やってくれて、我々が木流しをやったのは昭和56年洪水以降はないね。

※1 然別百年（然別地区関係誌）然別地区関係誌百年記念事業協議会、平成6年発行

※2 見流部において治水を緩和し堤防が崩れるのを防ぐ工夫



十勝川治水100年記念事業特刊号

鹿追・新得・十勝清水・芽室編



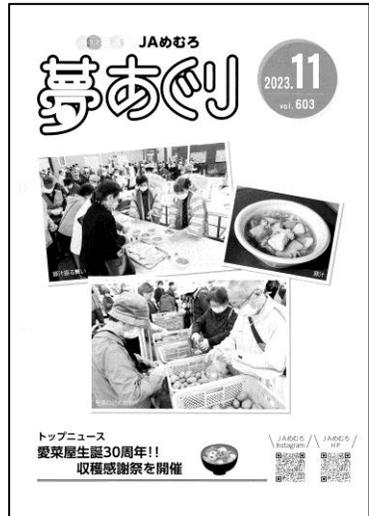
鹿追町農業協同組合
JA通信しかおい（11月号）



新得町農業協同組合
しんとく（12月号）



十勝清水町農業協同組合
十勝清水（11月号）



芽室町農業協同組合
夢あぐり（11月号）

Events, News, Topics



十勝川治水百年 特集（鹿追・新得・十勝清水・芽室編）

十勝川の治水事業が百年を迎えました

十勝川流域では明治時代から入植者による開拓が始まりましたが、当時の十勝川は曲がりくねっていて洪水被害を受けやすい地形でした。そこで、開拓の中心地域である茂岩から西帯広までの延長56kmにも及ぶ区間に堤防、新水路掘削、護岸工事を実施するための計画が立てられました。大正12年、十勝川治水事務所が開設（現在の帯広市大通南1丁目）され、本格的な治水事業が開始されました。



十勝川治水事務所（昭和2年頃）

十勝川上流域水と緑の農業地帯

十勝にはアイヌ語に由来する地名がいくつも残されていますが、十勝川上流域にも佐幌川（下の川）、ペレ川（下の川）、流の川、芽室川（泉沼から来る川）と面影が残っています。松浦武四郎が「十勝日記」でアイヌから歓迎を受けた「二下マップ（現・清水町人集）」も「木が響る川」という意味で、古来より川や水が身近な地域だと想像されます。明治30年以降、開拓が本格化し、肥沃な十勝川沿川のうち、たとえば芽室村は「十勝大豆第一の産地」とされるなど、鉄道開通の相乗効果で地域は発展していきましました。渋沢栄一で知られる十勝開墾合資会社は明治31年に熊牛、ニトマップ、美萐等を農場経営に着手し、地域の礎を築きました。一方でかつての十勝川は蛇行し、明治31年の大洪水など水害に悩まされた美生中島や西士狩の地域では、大正6年に川の切り替えをめぐって地域同士の対立が起りました。大正12年以降、十勝川水系の治水事業が本格化し、堤防が推し進められ、昭和30年代には毛根中島、芽室大の河道切替を実施し、十勝川の治水事業は豊かな水と緑に恵まれた農業地帯を支えてきました。

あのときのおもいで 佐幌川の恩恵と宿命

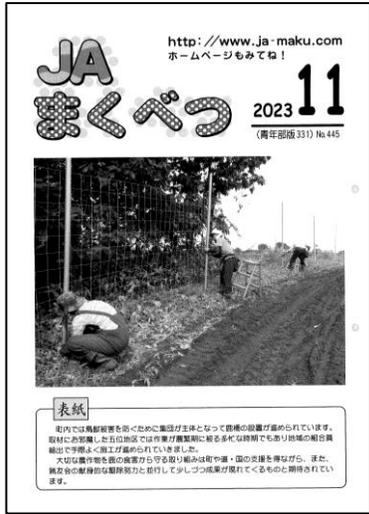
私の地区は開拓に入った地域に由来して窪地と呼ばれています。川に近い集落のため、かつては水田地帯でした。入植の頃はサケが遡上していたようで、支流にはカザリもいました。魚やコメを食べられたので、当時は比較的恵まれた地域だったと言えるかもしれません。川が暴れるのは宿命ですが、沿川の畑は地表の温度が上がりやすいため、冷害の年でも他の畑より収量がありました。また肥料が高騰の最中、肥料が少なく済む土壌であるのは利点です。一方で高温になると石が多いため乾燥しやすく、行政には水対策を進めてもらっています。



JA 十勝清水町 今野典幸さん（56）

※1【此の自然の水】 永田芳正 著 注釈『成澤堤防築造記録』、成澤堤防会発刊、1908。国立国会図書館デジタルコレクション
さそり画 【全体速】 リーダーシップを発揮して、少しセツカになりながらと、周りの話を聞き歩調を合わせればスムーズに進みます（10/24～11/22）【健康速】 歯科検診へ。口内炎や歯痛は早めケアを【幸運の食べ物】 ナス

幕別・十勝池田・豊頃・浦幌編



http://www.ja-maku.com
ホームページもみてね！

JAまくべつ 2023 11
(青年部版 331) No.445

表紙
町内では稲刈りも終わりに近づき、田舎が主体となって田舎の風景が描かれています。取材にお邪魔した白鳥地区では作業が最盛期に達する冬は時期でもあり地域の顔合わせ、秋の収穫、冬支度などが盛りだくさんです。また、大きなお祭りや行事の開催から守る取り組み、地域の交流を導きながら、また、親友の健康や家族の絆を大切に生きていく姿が描かれています。

幕別町農業協同組合
JAまくべつ（11月号）



JAとうもろこし広報紙
2023 秋号

豊頃町農業協同組合
とうもろこし

豊頃町農業協同組合
煌（秋号）



創造 JA いけだ 2023 11
CREATION

CONTENTS
2023 11
No.167

十勝池田町農業協同組合
創造（11月号）



うらほろ 2023 10
No.684

浦幌町農業協同組合
JAうらほろ

デントコーンコントラ収穫機

浦幌町農業協同組合
JAうらほろ（10月号）

十勝川の治水事業が百年を迎えました

十勝川流域では明治時代から入植者による開拓が始まっていますが、当時の十勝川は曲がりくねって洪水被害を受けやすい地形でした。

そこで、開拓の中心地域である茂岩から西富店までの延長56kmにも及ぶ区間に堤防、新水路築削、護岸工事を実施するための計画が立てられました。大正12年、十勝川治水事務所が開設（現在の富田町大通南1丁目）され、本格的な治水事業が開始されました。

100 十勝川治水 100年

十勝川治水百年 特集（幕別・十勝池田・豊頃・浦幌編）

開拓の大動脈 十勝川が運んだ人と物

明治期、十勝川沿いの地域は人と物の行き来が盛んでした。土地の豊かさでは十勝川沿岸が第一、利別川沿岸が第二とされ、多くの入植者たちが豊かな土地を求めて集まりました。

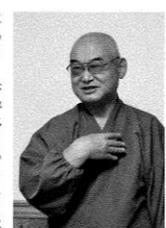
河口の大津は内陸へ向かう川舟の起点であり、十勝川をさかのぼっていくと、茂岩や武山、利別などの船着場がありました。船着場には倉庫や商店が立ち並び市街地を形成。川を渡るための渡船場も整備されていきました。

一方で川沿いの入植者は水害に苦しめられました。十勝川を遡上して利別太フン山麓に入植した武山土平は水害に遭い武山に移住。その後地域の有力者になり、明治31年大洪水の被災者のために所有地を無償提供しました。その地は「武山市街」と呼ばれ、鉄道開通により止若に市街地が移るまで繁栄しました。

あつきのおもいで もぐり橋の想い出と渡船がつかない地域の記憶

池田の水害でもっとも影響を受けたのは利別から川合の人たち。私がかぎり明治26年頃から入植されています。川のそばで作れるものといったアワやヒエで、植えても毎年のような洪水のため、土や労働力の馬が流されてしまう。馬が食べるエン麦やコマ作りを熱望して少しでも高い池田や青山へ土地を求めた人も。氾濫の名残が三日月や大曲など古い地名に残っています。今こそ大規模灌漑管が増えましたが、初代は神や仏もないものかという思いを持ちながらも、その地で頑張っていました。

もぐり橋は4、5歳の頃、車で渡っていて恐ろしかった記憶が。荷馬車の馬がおびえて立往生することもあったと地域の人から聞きました。明治から大正にかけて池田の中心は利別でした。利別の渡船場が池田発祥の地。利別や川合、特に千代田の人は渡船を避けて池田ではなく止若（幕別）で銅や釜などの生活用品を買い求めていた。幕別の時計屋さんは今も利別に商いに来ています。千代田は幕別のお寺の檀家がいます。鉄道開通で利別駅、池田駅に市街地が移った後も、そうした人との交流は現在も続いています。

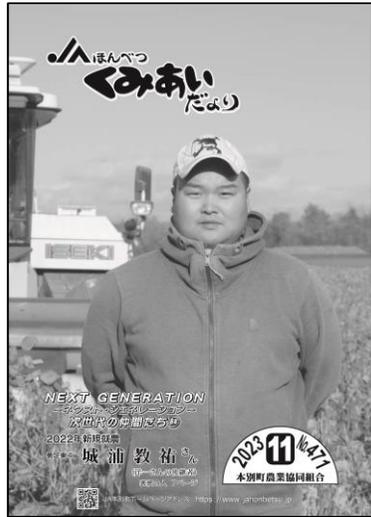


池田神社 宮司 岩崎寿彦さん (62)

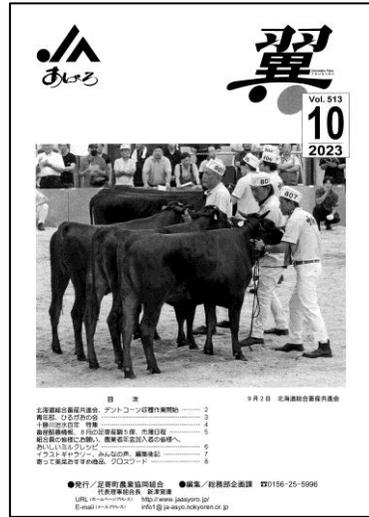
【もぐり橋】昭和31年川合新水路（利別川）工事にともない川合泉36号線に架設された川合橋の通称。現在の川合大橋の約30m下流に位置。全国的にも珍しい増水時に冠水する橋で、朝ドラ主題歌で歌われるなど地域からも愛された。

掲載例（幕別町農業協同組合「JAまくべつ」（11月号）から転載）

本別・足寄・陸別編



本別町農業協同組合
くみあいだより（11月号）



足寄町農業協同組合
翼（10月号）



陸別町農業協同組合
のうきょうだより（1月号）

十勝川の治水事業が百年を迎えました

十勝川流域では明治時代から入植者による開拓が始まっていましたが、当時の十勝川は曲がりくねって洪水被害を受けやすい地形でした。

そこで、開拓の中心地域である茂岩から西富店までの延長56kmにも及ぶ区間に堤防、新水路掘削、護岸工事を実施するための計画が立てられました。大正12年、十勝川治水事務所が開設（現在の富田市大通南1丁目）され、本格的な治水事業が開始されました。



十勝川治水百年 特集（本別・足寄・陸別編）



シノコヤシ付近（利別川）の流送

利別川上流域 河川を利用した「流送」

利別川は東三国山を源流に、陸別町市街地では陸別川や斗濠川と合流、足寄町市街地では足寄川と合流した後、本別町市街地を経て、池田町で十勝川と合流します。

地域の産業として、林業は明治10年代から盛んで、河川を利用した輸送手段として流送が行われてきました。農業は開拓のはじめ利別川沿川の平地で豆類の畑作が営まれ、昭和10年代から丘陵地で酪農が営まれました。十勝の流送は昭和29年利別川支流の美里別川を最後に役目を終え、鉄道やトラック輸送に切り替わりました。

利別川の治水事業としては、河道掘削や堤防・護岸の整備等、市街地や農地等を守るための対策が進められています。（写真左上、左下：本別町提供）



昭和30年頃 本別駅からの木材の輸送

あのときのおもいで 足寄川 電柱の一本橋

じいちゃんが18歳のときに福島県から親戚を頼って足寄にやってきました。家のそばを流れる足寄川では、10代の頃は魚とり、釣りもしました。隣の叔父さんが「魚すくいにくいぞ」といって、農作業の昼休みどきに、一緒に三角網をもってウグイ、カジカ、ドジョウが結構とれた思い出があります。焼いて食べたり、甘露煮みたいにやわく煮て甘味をつけて。おいしかったです。

おかしは畑に行くのに国道を回ると道回りだから一本橋がありました。30cmくらいの木製の電柱を2本たばねて、1本分では長さが足りないから真ん中に支柱を置いてわたしていた。小学生のころ渡ったときは、おばさんの手につかまって真ん中まできて、川の流れを見ると結構高くて目が回るんだよね。

平成28年8月台風では畑が流されて、深くて1m50cmけずられたところも。堰滞りから山の土を客土してもらったけど土が沈んで機械が入れないのは困りました。作物の出来は最初ひどかったけど、今年のスイートコーンは以前と同じくらいに生育してくれたかな。徐々によくなってきているみたいだね。



JAあしよる（堰滞在住）
齊須元長さん（71）



十勝川治水100年 記念事業 特設サイト

掲載例（足寄町農業協同組合「翼」（10月号）から転載）

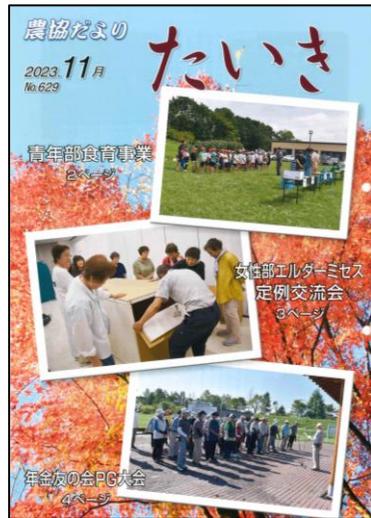
忠類・大樹・広尾編



忠類農業協同組合
I♡ちゅうるい（10・11月号）



広尾町農業協同組合
JAひろお通信ピロロ（11月号）



大樹町農業協同組合
農協だよりたいき（11月号）

I♡ちゅうるい I Love Churui

十勝川の治水事業が百年を迎えました

十勝川流域では明治時代から入植者による開拓が始まりましたが、当時の十勝川は曲がりくねっていて洪水被害を受けやすい地形でした。そこで、開拓の中心地域である茂岩から西帯広までの延長50kmにも及ぶ区間に堤防、新水路掘削、護岸工事を実施するための計画が立てられました。大正12年、十勝川治水事務所が開設（現在の帯広市大通南1丁目）され、本格的な治水事業が開始されました。

海から川へ進む開拓砂金目的で移住した人々

日富山脈からいくつも河川が流れる南十勝の広尾、大樹、忠類の地域は開拓のはじめ広尾郡（茂岩村、当緑村（豊舟村、大樹村、当緑村）と呼ばれていました。開拓では河川沿いの低地から進み、帯村では明治中頃から山形や富山などから入植者が紋別川、広尾川、赤川川をそれぞれ移住し、馬鈴薯、麦などを耕作していましたが、あくまで自家の食糧としてで、販売するほどの余力はなく、マッチ工場や新炭売り、漁業で糊口をまわしていたのが、当緑郡は明治19年に脱成社がイカナイ原野に牧場を開いて馬、牛、豚を飼養しました。当緑村では山形からも砂金採掘を目的に移住してきた人も、忠類開拓の祖・岡田新三郎は九山の南側のふもと、当緑川のそばに入植しました。

(上) 明治30年ごろの広尾郡、当緑郡の地図①
(下) 脱成社の依田邸②

あのときのおもいで

子ども時代は豊舟川と呼ばず「日方川」（ひかたがわ）と呼んでいました。昭和30年代はプールがなくみんな川で遊んでいた。黒猫まわし（ふんどし）を巻いて、青々とした川面を泳いだり、川底のきれいな石を拾ってきたり、深さは2.3mあって燕靴から飛び込むこともできた。でっかい頭のカジカ、ドジョウが泳いでいました。小学校行事で「川鈴り」もあって、川の水を汲んでカレーライスを作ったこともありました。

以前は南の日方地区からの暖かい風が日富山脈に向かって吹くと、山の雪が融けて水がどっと流れてきて、災害が起こることもありました。今はなくなり、一方で、砂利が減り河畔林が増えました。札内川のような噴原再生を豊舟川でも行いたいと思っています。

かつては農家の糞尿処理が川の課題でした。ところが平成4年に清流日本一を掲げて会を設立して、ゴミ拾い、草刈り、水質調査、魚道清掃、ヤマベ釣り、散策路整備などの活動が広まり、また堆肥舎整備も進んできて、農家や住民も環境保全に理解を示してくれるようになりました。ゴミも減ったし水質も良いです。余の解散後も若い人に協力できることはしたいと思っています。

豊舟川の清流を守る会
事務局長 伏見松彦さん（78）

ふんどしで遊んだ「日方川」（豊舟川）

13 551 10/11